

# 視点

## よみがえる『幻の味』

暑い暑い八月。企業によっては月のうち半分も休めるというのに、こちらには盆に二日休んだだけ。「過労死」「県内の首長の一割が入院」などの新聞の見出しが気になる。静岡岡部掛川市の奥村市長は、「年間三千五百時間働いている」と市報に書いておられるが、私の感じではもっと多いように思う。一般の人の倍近く働いている勘定だ。とにかく今月も東奔西走の毎日だ。

「瓜連(うりづら)」

茨城・瓜連町町長



先崎 千尋

# 町挙げて復活のノロシ

らというんだから、瓜がそこら中にまがってるとなろう。昔懐かしにまくわ瓜を食べてみたいなあ。昨年の今ごろ、ある人から瓜藤半分

にこう言われた。瓜がまがっているものは大したものはない。陸合のお母さんたちが作った瓜の里。稲畑にまがってしまわぬ瓜を、といつつけもの。酒は地元産の米で、はなは、フイ又藤の「聖なる神々」の唐むす丘」という意味が語源と聞いている。

だが、この際はこの話を聞いたころ、とどきとどき思った。そして、昨年発足した町のいきいきセンター(経済課内)の所長や瓜連塾のメンバーに話したところ、これも即座にのってきた。仙台で「瓜の会」を主宰している大泉東北大助教授とも連

絡がとれたし、まくわ瓜の本家・岐阜県真正町(旧真桑村)からは種子を分けていた。山ができた。瓜は万葉集に山上憶良の「瓜食(は)めば、子供思ほゆ……」という歌があるように、奈良時代から全国各地で栽培されていたようだ。そして真桑産の瓜は、特に香りと風味が優れていたため、真桑瓜と名付けられたとか。

さて、私は八月上旬、真正町のまくわ瓜の畑に立った。黄金色と緑の

しま模様の米俵の形をした、あのまくわ瓜がまきにまがっている。何とない高貴な香りが漂って、料であるこの種物は、平将門の時代に納えてしまったようだ。現物には残っていないので、どんなものかはわからない。

千二百年も前の人たちのくらしがどんだったかを、しじ織を木造校舎で織りながら考える。瓜連小はだしの教育の実験校でもある。はだし、木造校舎、しじ織とそろえば、新しい何かが生まれているのでは、と考えている。

るものは大したものはない。陸合のお母さんたちが作った瓜の里。稲畑にまがってしまわぬ瓜を、といつつけもの。酒は地元産の米で、はなは、フイ又藤の「聖なる神々」の唐むす丘」という意味が語源と聞いている。

だが、この際はこの話を聞いたころ、とどきとどき思った。そして、昨年発足した町のいきいきセンター(経済課内)の所長や瓜連塾のメンバーに話したところ、これも即座にのってきた。仙台で「瓜の会」を主宰している大泉東北大助教授とも連

絡がとれたし、まくわ瓜の本家・岐阜県真正町(旧真桑村)からは種子を分けていた。山ができた。瓜は万葉集に山上憶良の「瓜食(は)めば、子供思ほゆ……」という歌があるように、奈良時代から全国各地で栽培されていたようだ。そして真桑産の瓜は、特に香りと風味が優れていたため、真桑瓜と名付けられたとか。

さて、私は八月上旬、真正町のまくわ瓜の畑に立った。黄金色と緑の

るものは大したものはない。陸合のお母さんたちが作った瓜の里。稲畑にまがってしまわぬ瓜を、といつつけもの。酒は地元産の米で、はなは、フイ又藤の「聖なる神々」の唐むす丘」という意味が語源と聞いている。

だが、この際はこの話を聞いたころ、とどきとどき思った。そして、昨年発足した町のいきいきセンター(経済課内)の所長や瓜連塾のメンバーに話したところ、これも即座にのってきた。仙台で「瓜の会」を主宰している大泉東北大助教授とも連

絡がとれたし、まくわ瓜の本家・岐阜県真正町(旧真桑村)からは種子を分けていた。山ができた。瓜は万葉集に山上憶良の「瓜食(は)めば、子供思ほゆ……」という歌があるように、奈良時代から全国各地で栽培されていたようだ。そして真桑産の瓜は、特に香りと風味が優れていたため、真桑瓜と名付けられたとか。

さて、私は八月上旬、真正町のまくわ瓜の畑に立った。黄金色と緑の

るものは大したものはない。陸合のお母さんたちが作った瓜の里。稲畑にまがってしまわぬ瓜を、といつつけもの。酒は地元産の米で、はなは、フイ又藤の「聖なる神々」の唐むす丘」という意味が語源と聞いている。

だが、この際はこの話を聞いたころ、とどきとどき思った。そして、昨年発足した町のいきいきセンター(経済課内)の所長や瓜連塾のメンバーに話したところ、これも即座にのってきた。仙台で「瓜の会」を主宰している大泉東北大助教授とも連

絡がとれたし、まくわ瓜の本家・岐阜県真正町(旧真桑村)からは種子を分けていた。山ができた。瓜は万葉集に山上憶良の「瓜食(は)めば、子供思ほゆ……」という歌があるように、奈良時代から全国各地で栽培されていたようだ。そして真桑産の瓜は、特に香りと風味が優れていたため、真桑瓜と名付けられたとか。

さて、私は八月上旬、真正町のまくわ瓜の畑に立った。黄金色と緑の

るものは大したものはない。陸合のお母さんたちが作った瓜の里。稲畑にまがってしまわぬ瓜を、といつつけもの。酒は地元産の米で、はなは、フイ又藤の「聖なる神々」の唐むす丘」という意味が語源と聞いている。

だが、この際はこの話を聞いたころ、とどきとどき思った。そして、昨年発足した町のいきいきセンター(経済課内)の所長や瓜連塾のメンバーに話したところ、これも即座にのってきた。仙台で「瓜の会」を主宰している大泉東北大助教授とも連

絡がとれたし、まくわ瓜の本家・岐阜県真正町(旧真桑村)からは種子を分けていた。山ができた。瓜は万葉集に山上憶良の「瓜食(は)めば、子供思ほゆ……」という歌があるように、奈良時代から全国各地で栽培されていたようだ。そして真桑産の瓜は、特に香りと風味が優れていたため、真桑瓜と名付けられたとか。

さて、私は八月上旬、真正町のまくわ瓜の畑に立った。黄金色と緑の

るものは大したものはない。陸合のお母さんたちが作った瓜の里。稲畑にまがってしまわぬ瓜を、といつつけもの。酒は地元産の米で、はなは、フイ又藤の「聖なる神々」の唐むす丘」という意味が語源と聞いている。

だが、この際はこの話を聞いたころ、とどきとどき思った。そして、昨年発足した町のいきいきセンター(経済課内)の所長や瓜連塾のメンバーに話したところ、これも即座にのってきた。仙台で「瓜の会」を主宰している大泉東北大助教授とも連

絡がとれたし、まくわ瓜の本家・岐阜県真正町(旧真桑村)からは種子を分けていた。山ができた。瓜は万葉集に山上憶良の「瓜食(は)めば、子供思ほゆ……」という歌があるように、奈良時代から全国各地で栽培されていたようだ。そして真桑産の瓜は、特に香りと風味が優れていたため、真桑瓜と名付けられたとか。

さて、私は八月上旬、真正町のまくわ瓜の畑に立った。黄金色と緑の

るものは大したものはない。陸合のお母さんたちが作った瓜の里。稲畑にまがってしまわぬ瓜を、といつつけもの。酒は地元産の米で、はなは、フイ又藤の「聖なる神々」の唐むす丘」という意味が語源と聞いている。

だが、この際はこの話を聞いたころ、とどきとどき思った。そして、昨年発足した町のいきいきセンター(経済課内)の所長や瓜連塾のメンバーに話したところ、これも即座にのってきた。仙台で「瓜の会」を主宰している大泉東北大助教授とも連

絡がとれたし、まくわ瓜の本家・岐阜県真正町(旧真桑村)からは種子を分けていた。山ができた。瓜は万葉集に山上憶良の「瓜食(は)めば、子供思ほゆ……」という歌があるように、奈良時代から全国各地で栽培されていたようだ。そして真桑産の瓜は、特に香りと風味が優れていたため、真桑瓜と名付けられたとか。

さて、私は八月上旬、真正町のまくわ瓜の畑に立った。黄金色と緑の